



STUDENT'S VOICE

1

実践的な課題設定



STUDENT'S VOICE

2

明確な目的と
初期オリンエン

STUDENT'S VOICE

3

毎日の個別
フィードバック

STUDENT'S VOICE

4

発表会での
本音レビュー

STUDENT'S VOICE

1

実践的な課題設定

学生が成長できた 実務訓練プログラム のご紹介

7つの実例から見える“成長を設計する”ヒント

本学では毎年、多くの企業様のご協力のもと、

実務訓練を実施しています。

この制度は、学生が「実社会で働くことを通じて成長する」だけでなく、

その過程が企業にとっても「若手育成」「組織の学び直し」

「ブランド価値向上」につながるなど、

本学は、企業と WIN-WINの関係を追求し

より良い実務訓練の推進を目指しています。

本リーフレットでは、7名の学生の実体験から、

“成長を生み出した企業側の関わり方や仕組み”をまとめました。

実務訓練は、教育の枠を超えて

「本学と企業が未来を育てる場」であると捉えています。

学生の成長に寄り添ってくださる企業の皆様に心より感謝申し上げます。

この7つの実例が、

貴社にとっても価値ある実務訓練となるよう一助となれば幸いです。

STUDENT'S VOICE

5

質問しやすい風土

STUDENT'S VOICE

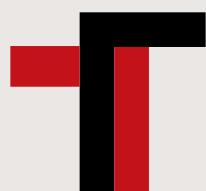
6

多様な職場体験



STUDENT'S VOICE

4

発表会での
本音レビュー

STUDENT'S VOICE

7

主体性を引き出す
“余白のある指導”



実務訓練が企業にもたらす 3つのポジティブな影響

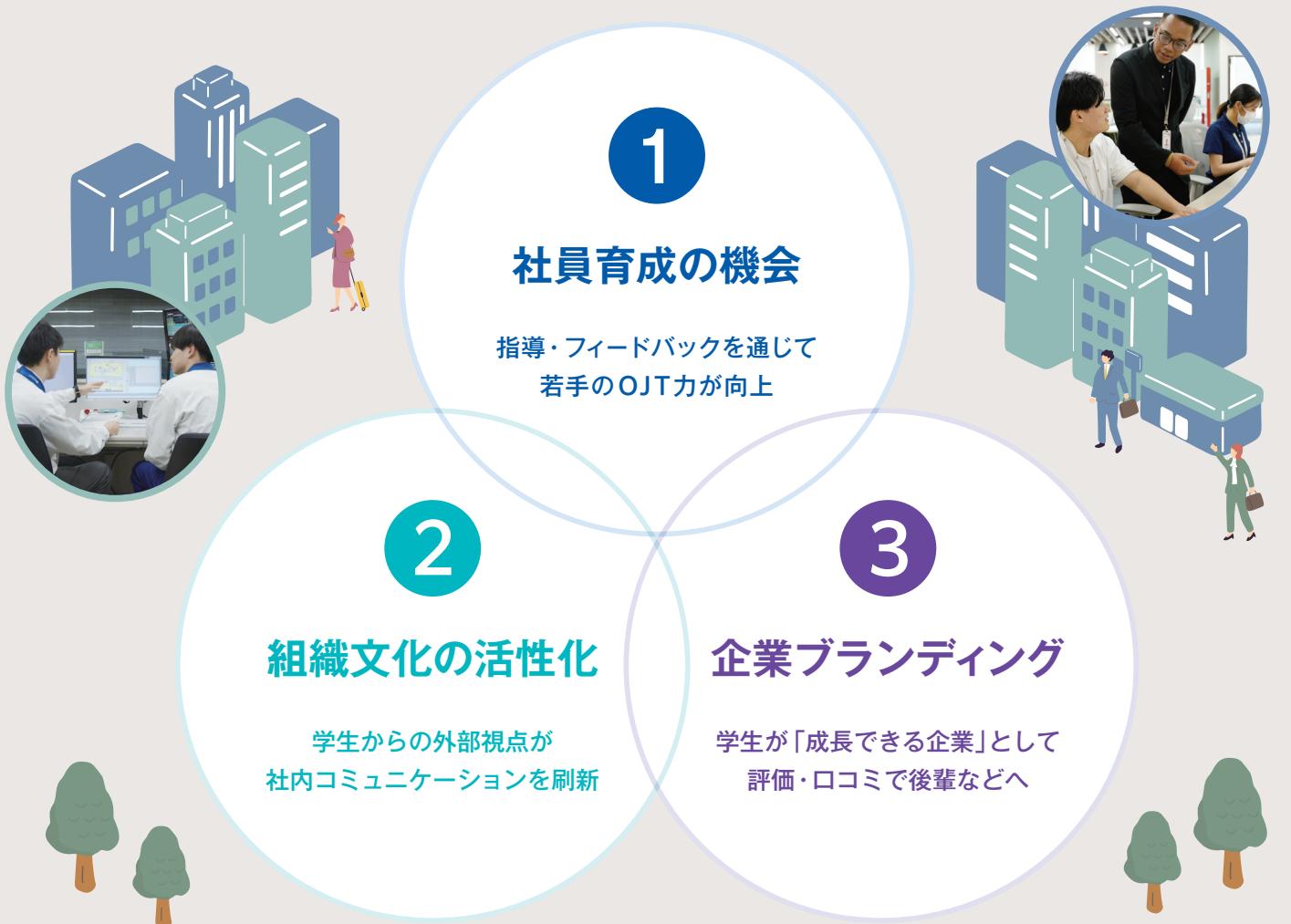


学生の成長を設計することが、企業にも大きなメリットがあると考えます。

学生の成長を意図的に設計することは、企業にとっても大きなメリットをもたらします。

若手社員にとっては「教える経験」が成長の機会となり、社内には新しい視点と活気が生まれます。

また、学生が感じた成長体験は「企業ブランド」として外部に発信され、採用力や組織力の強化にもつながります。



1

学生の挑戦は、
社員の指導力を
磨く機会にも。

実務訓練で学生を指導することは、若手社員にとっても貴重な成長の場です。教える中で自らの仕事を整理し、伝える力やリーダーシップが磨かれます。次世代育成を通して、チーム全体の成長意識も高まります。

2

学生の成長の設計は
“職場の学び直し”
にも効果。

学生に学びを提供するプロセスは、社員自身が仕事の意味や目的を再確認するきっかけになります。今までの経験を整理し、改めて自らの役割や価値を見つめ直すことで、職場全体の学び直し文化が育まれます。

3

企業の魅力や
仕事の本質を
“言語化する場”となる。

学生に企業の価値や仕事内容を伝える過程で、社員は自社の強みや存在意義を言葉にする力を養います。こうした対話の積み重ねが、組織のブランディングや採用力の向上につながっていきます。



“任せる”と“伴走する”のバランスが成長を生む



学生が 成長できた 企業の関わり方

STUDENT'S
VOICE

1

実践的な課題設定

注目の成長ポイント

実務訓練を通じて、自ら計画を立て行動し、課題に主体的に向き合う力が大きく向上した。任された業務に責任を持ち、試行錯誤を重ねる中で、自分の成長を自ら設計できるようになった点が最大の成果と言える。



任されることで、人は考え、動き、変わっていく。
その経験が、自分を成長させる原動力に

私は建築DX系のベンチャー企業での実務訓練を通じて、「実践的な課題設定」が自分を大きく成長させることを実感しました。**訓練では毎週異なる課題が与えられ、1週間単位で計画を立て、実行し、報告するというサイクルを繰り返しました。**ときには、実際のクライアント向け提案資料の作成など、業務の一部を任されることもあり、自分の成果が会社の成果物として使われるとい

う責任感が生まれました。最初は相手に伝わりにくい資料を作っていましたが、担当エンジニアから「相手の目的や立場を踏まえた構成に」と助言を受け、試行錯誤の末に伝える力と主体性を磨くことができました。大学に戻ってからは、研究発表でも結論から説明するようになり、聞き手を意識した論理的な構成を意識できるようになりました。

STUDENT'S
VOICE

2

明確な目的と初期オリエン

注目の成長ポイント

実務訓練では、与えられた課題に対して「なぜこの実験を行うのか」を常に意識し、目的に照らして改善点を見出す姿勢が身についた。仮説を立て、検証し、必要に応じて方法を見直す過程で、課題発見力が大きく向上した。



最初に聞いた“なぜこの研究をするのか？”。
目的は、“誰かの役に立つ”ことだと気づいた。

私は食品原材料メーカーの研究室での実務訓練を通じて、「明確な目的と初期オリエン」が成長の軸になることを実感しました。初日に「なぜこの研究を行うのか」を共有されたことで、単なる科学的評価ではなく、「食品会社の要望に応えるデータをつくる」という目的を理解しました。その瞬間から、自分の実験結果が社会に価値をもたらすものだという意識に変わりました。毎

週の進捗共有では、社員の方々と目的に沿った実験の方向性を議論。最初は相談しやすい環境に甘えて自分で考える前に質問してしまうこともありましたが、次第に「自分の考えを持って伝える」姿勢を意識するように。大学に戻ってからは、研究発表でも目的を先に示し、聞き手に伝わる構成を心がけています。

STUDENT'S
VOICE

3

毎日の個別フィードバック

注目の成長ポイント

毎日のフィードバックを通して、「なぜそうなるのか」を自分で考え、原因を掘り下げる姿勢が身についた。結果として、課題を表面的に捉えるのではなく、背景や構造まで見極めて改善策を導く課題発見力が向上した。



一つひとつの指摘が、考える力を育てくれた。
考え方抜く習慣が、成長への自信に変わった。

私は3Dプリンターを扱う企業での実務訓練を通じて、「毎日の個別フィードバック」が自分の成長を大きく後押ししたと感じています。訓練中は日報を提出し、担当の技術者から10~25分ほど対話形式で丁寧なフィードバックを受けました。最初は文章表現や作業手順の指摘が中心でしたが、次第に「なぜそう考えたのか」と問われるようになり、自分の思考を言語化して整理す

る力が身につきました。指摘は常に前向きな言葉で伝えられ、考える習慣が自信へと変わっていきました。大学に戻ってからは、研究室で後輩を指導する際に「まず良い点を伝えてから改善点を示す」など、学んだフィードバックの姿勢を意識的に取り入れるようになり、教えることの中にも実務訓練の学びが生きています。



実務が“キャリアの物語”になる瞬間をつくる

キャリア意識と企業ブランディングを高める“体験設計”



STUDENT'S
VOICE

4 発表会での本音レビュー

注目の成長ポイント

発表会での本音レビューを通じ、上司や仲間の指摘を素直に受け止め、次に活かす姿勢が身についた。意見を聞き、自分の考えを整理して伝える力が高まり、対人面で大きく成長した。



厳しい言葉で、考える力が目覚めた。
本音の指摘が、次の成長へ導いてくれた

私は半導体の開発部門での実務訓練の最終発表で、「報告はできているが、考察が足りない」と助言を受け、“考える力”的重要性に気づきました。成果をまとめるだけで満足していた自分にとって、その言葉は大きな転機でした。それ以降、結果を出すだけでなく「なぜそうなったのか」を掘り下げ、根拠をもって説明することを意識するようになりました。大学に戻ってからも、研究発表ではデータの背景や仮説を自分の言葉で伝える姿勢が身につきました。

STUDENT'S
VOICE

5 質問しやすい風土

注目の成長ポイント

苦手意識を乗り越え、自ら学びを深める姿勢が身についた。安心して挑戦できる環境の中で、指示を待つのではなく、自分から動き、解決に向けて行動する力が大きく伸びた。



「聞くこと」が、私の強さになった。
挑戦を恐れず進む自信が、そこから生まれた。

私はデータ分析系の企業での実務訓練で、最初は専門知識への不安がありました。担当の社員の方がテーマごとに質問できる人を紹介してください、最初は一緒に同行してもらえたことで安心して学べました。さらに、毎日の進捗共有の場で疑問を気軽に相談できる時間が設けられていたことも良かったです。大学の研究室に戻ってからは、自分から教員や仲間に相談し、課題の整理や次の一手を主体的に考えるようになりました、学びの姿勢そのものが変化しました。

STUDENT'S
VOICE

6 多様な職場体験



注目の成長ポイント

多様な立場の人との対話を通じて、物事を多角的に捉える力が向上した。異なる視点から考えることで、本質的な課題に気づく力が育まれた。



部署を越えた対話が、“自ら考える力”を磨いた。
現場の多様性が、成長の原動力になった。

海外の電子部品メーカーでの実務訓練を通じて、「多様な職場体験」が自分を大きく成長させたと感じています。メンターの方が、私の疑問に対して各部署の担当者を紹介してくださり、研究・開発・品質管理など多様な立場の方から話を伺う機会を得ました。その中で、机上だけではわからなかった現場のリアルを知り、自分で考え、行動に移す力が養われました。多様な視点に触れながら、自分なりの課題意識を深め、主体的に動く大切さを学びました。



STUDENT'S
VOICE

7 主体性を引き出す余白のある指導

注目の成長ポイント

対話を重ねる中で、相手を尊重しながらも自分の意見を明確に伝える力が向上した。指導を待つのではなく、自ら考え動く主体性が育まれた。



待っているだけでは、成長できなかつた。
自分から動くことで、学びが広がつた。

私は海外の製造現場での実務訓練を通じて、「答えを教えすぎない“対話的な指導”」のおかげで大きく成長できました。多様な民族が共に働く環境の中で、誰かが丁寧に何かを教えてくれるというより自分から質問することが求められました。それまでは周囲の空気を読みすぎて行動をためらうこともありましたが、「待っていても始まらない」と気づいてからは、自ら積極的に話しかけ、対話を重ねるようになりました。その経験を通じて、わからないことを放置せず、自ら考えて動く姿勢が身につき、大学に戻ってからも主体的に研究を進めるようになりました。

本学では、学生が社会で活躍するために必要な力を「対人」「対課題」「対自己」の3つの側面から体系的に育成しています。グループワークや発表などを通じて多様な人と協働する対人(コミュニケーション力)を養い、実践的な課題解決型学習で対課題(課題発見力)を伸ばします。さらに、学びの振り返りやキャリア形成支援を通して対自己(主体性)を高め、自ら考え、行動し、学び続ける力を育てます。



実務訓練に関するお問い合わせ：豊橋技術科学大学 教務課連携教育支援係

〒441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1 ☎0532-44-6595 ✉career@office.tut.ac.jp 🌐<https://www.tut.ac.jp/university/training/>